

太田洋子集

第三卷 夕風の街と人と

大田澤子集

大田洋子集 第三巻

1982年 9 月 30 日 第1版第1刷発行

著 者 大 田 洋 子
© 中川一枝 1982年

発行者 菊 地 喜 三 次

印刷所 誠和印刷株式会社

製本所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9
電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番
振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番
郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

Printed in Japan

大田洋子集 第三卷／夕風の街と人と／目次

夕風の街と人と	5	
半放浪	295	
八十歳	315	
世に迷う——ふしぎな弟と私——	353	
解説	403	栗原貞子
解題	416	浦西和彦
		題字・装画〈原爆の図〉
		丸木位里・丸木俊
		装丁 岡島茂夫

大田洋子集 第三卷／夕風の街と人と

本集に収録するに際して、各作品の漢字は新字体に改め（俗字・宛字は原文のまま）、仮名づかいは現代仮名づかいに統一し（送り仮名は原文のまま）、促音・拗音は小字で表記した。

夕風の街と人——一九五三年の実態——

自動車は八人もの人を乗せているので、ゆっくりと重たげに走った。

走っているというほどでなく、大型の自動車の形をした箱に、八人の女たちを詰めこんで、ぶらぶら歩いている程度であった。

道には大小の石ころが、いたるところにころがっていた。石ころは尖っていた。白や赤の夏の花をつけた雑草は、篤子の眼に、おびたらしい尖った石ころと身をよせあっているように見えた。そこは人や車の通り道にはなっているが、普通の道路らしい道路のわけではなかった。その証拠に、テイ子は自分の家に篤子を案内して帰る道順がわからない風だった。

「どうゆくのかしら。ここ野砲隊のあとでしょ？」

テイ子は心細そうに運転手に訊いた。

「あら、あんた、自分の家にかえる道わからないの」

テイ子の姉の光代が笑いながら言った。二人とも篤子の妹である。

「おんなじ家ばかり、何千軒もあるからねえ。いったい、ハモニカ住宅というのは、何千軒ほどあるもんですかね」

若い運転手は横柄な口をきいた。この広い異様な区域の有様を馬鹿にしている口ぶりだった。テイ子は車のなかで腰を浮かせて言った。

「なんだか車にのってて、道、迷いそうよ」

光代の娘や、テイ子の小さいふたりの娘たちは、車のなかで迷い子になりかけていることが、おもしろいことでもあるように、肩を押しつけあって、笑い声を立てた。篤子が東京からつれてきた年とった女中も、あたりの異風景にきよんとしていたが、小さい娘たちの笑い声に誘われ、いっしょになって笑い声を立てた。高齢の篤子たちの母だけが、自分たちがちかごろでは乗りなれない自動車に乗ったために、却って帰宅に手間どっていることを、篤子に気の毒だという様子で、おどおどしていた。

これだけの人数を乗せた自動車は、もとの野砲隊あとの入口をはいろうとしていた。二つの巨大な石の門柱が残骸めいて向いあっている。コンクリートの歩哨舎が、左手横にぼつんと立っていた。これも残骸であった。いまはたった一人の兵隊もそこにいなかった。石の門柱と歩哨舎は、なにかの影のようだった。篤子の眼には陰惨に見えた。東京から着いたばかりの小田篤子は、駅前でテイ子の配慮で乗った大人数の自動車が、すでにもとの兵営の広大な区域にはいつていることに気づいていた。現在では、貧民街と云われている住宅群が、視野いっぱいに見えているからだった。

整然と並列している家々の群は、這いつくばっている小材木の朽ち果てた黒いかたまりに見えた。篤子が三年前東京からここに来たとき、灰色じみて見えたこのブロック住宅が、いまでは黒ずんでいる。けれども篤子の心にこもっているこの貧しい町への親愛の思いに変わりはなかった。

午後の三時をかなりすぎていた。この時刻にやってくる、この街特有の夕風がはやくもはじまっている。風はぴたりととまっていた。一滴の風もなかった。蒸れるような暑さのために、手の甲にまで汗の玉がふき出た。車のなかで、人々が口をきかなくなるほどの、息づまる暑さであった。篤子はこ

の真夏の夕風の季節をさけるために、八月の末をえらんで東京を発ったのだった。そのくせ夕風の名残りにふれたいとも思っていた。夕風の窒息感に、この街の姿が似ていた。身のおき場のない夕風の熱気をおびた圧迫感は、この街の生きのこりの人々の姿にそっくり似ている。

「暑いわね」

と篤子は云った。東京からつれてきた石田すぎの齒のぬけた顔を見た。

「なんてこちらは暑い街でしょう」

すぎはこの街にきたのははじめてであった。

「これが夕風よ」

「ああ？」

風の停止した空気の熱さが、彼女には了解できないようだった。乾いた熱い空気のなかを、自動車はもとの野砲隊の裏門にぬけた。

白い道があった。白く燃えているように見える。篤子にとって見覚えのある、きちんとした舗装道路であった。一本に貫いた旧軍隊内の広い立派な道をはさみ、平たい黒ずんだ家々が、ぎっしり詰まって並んでいた。いまにも消えてなくなるような、小さな家屋の行列だった。三年前にくらべ、一見繁栄しているかに見えた。白い道の両脇は、いまではこの住宅地区の表通りになっている。あらゆる店、魚屋や八百屋、菓子屋や肉屋や飲食店、床屋やパーマネントの店、洋品店や呉服店や本屋や薬屋などが、争うようにならんでいるのだ。同じ種類の店が幾軒もあった。そして同じ通りに風呂屋もあれば麻雀屋も碁会所もあった。時計屋も下駄屋も、あんまや、助産婦の看板も一様にならんでいる。

それほどこの南北につらぬいた、厚味のある、旧軍隊の白い道のりは長かった。兵營の廢墟のうえにできあがっているこのありとあらゆる商店群は、ここの貧民街における唯一の繁華街であった。自動車は白熱する商店街をしばらく走った。西側に、野砲隊あとと同様の、巨きな石の門と歩哨舎の名残りが幾つか見えた。陸軍病院や輜重隊跡であった。いうまでもなくこの廢墟にも、みすばらしい住宅は、長いハモニカ型の列になって見渡すかぎり建ちならんでいた。

「えッと！　ここからはいってください」

テイ子は車のなかでとびあがるようにして云った。自動車は輜重隊の石門の一つをはいって行った。住宅の群が、むっとするようにかたまっていた。家々の列は碁盤の目の形に、縦横の方形になっているから、車は大きな石畳の通路を、四角に通らぬけて行った。どこにその匂いがあるのか、匂いの根拠はわからないが、得体のしれない悪臭が篤子の鼻をついてきた。どんな場合にも経験したと思えない、いやな、肥料じみた妙な悪臭であった。悪臭はかなり濃いものだった。篤子はそれをテイ子にも母にも訊かなかった。篤子は、以前にたびたび来たときに比べ、碁盤形の家の配列が、どことなく乱れていることに気づいた。小さな家々のあいだに、それよりもっと小さな家が点在しているのだ。

「どうしたの？　家と家とのあいだに、また家が建ったの？」

篤子はテイ子に訊いた。

「閑住宅なんですよ。こまっちゃってしまうの。どこかで組立てて、夜中にもってきても、朝見ると、によきッと建っているんですもの」

「どこからくるの」

「どこからか追われてくるんでしょ。どこからともなく来て、住んでしまふのよ」

「なんだろう?」

「なにしろねエ」

と光代が言った。

「この街の五十パーセントを道路にする方針だつていうんですものね。道路ばかりじゃないのよ。緑地帯だの公園だの、どこということなく街中にできるんですからね。せつかく住むところをもっている人たちが、あっちを追われ、こっちを追われして、居るにいられないのが、こんなところまではいってくるらしいのね」

家の列と列とのあいだの、重厚な石畳のうえに、一定の間隔をおき、丸い石の柱がまっすぐに立ちならんでいる。丸い石柱には上部に穴があき、鉄の環がはまっていた。輻重隊の馬のつなぎ場であった。一人の小さい瘠せた男が、鉄の環に麻紐を通し、その長い紐を次の柱の環にまきつけていた。男はどこまでも一本の麻紐を石の柱の環に通して行つた。女の子供と太った女とが洗濯物を紐にかけて歩いた。小さな家の屋根に「洗濯屋」という看板がかかっている。この合法的な戦災者住宅の、マスの目形の縦列のあいだに、不法建築されたという小さい家々は、ほとんど何かの商売をしていた。駄菓子屋や豆腐屋や、大工や屋根屋があった。家に不似合いな大きな看板を出していた。瘠せた男と太った女と、そして子供の三人は、夕風の風のとまった熱気のなかで、洋服や紺の着物や浴衣、青や赤の布切れを、もとの馬のつなぎ場の石柱にからめた紐に、ごたごたとかけならべている。

自動車は、同じような家の行列の、その一軒の家の前にとまった。何年か間においてはやってきて、

眼底にこびりついている粗末な入口の引き戸を簞子は眼にした。一戸建てのあばら屋のまわりに、花がつくつてある。

どの家でもがきつとそうしているように、テイ子の家の前にも、右手によせて石ころがつんであった。兵營の花壇の崩壊の石であった。石ころはつみあげたり、輪の形にならべられていた。くさりかけた戦災者住宅の、それが飾りのようだった。テイ子の家の、つみかさねた石の傍にいちじくの木があった。背の低い、太い幹をもったいちじくの木は、葉を繁らせていた。葉のあいだにさきのぼつと赤い実がふくらとして鈴なりになっている。豊穰な一本のいちじくの木は、それが豊穰であることで、簞子の胸にかすかな哀しみをもたらした。

八人の女たちは、自動車のなかからほとんどじかに、家のなかに吐きだされた。駅に簞子を出迎えた母や二人の妹や姪たちは、小さな家のなかの、畳に坐ると、手について、あらためて簞子と挨拶を交しあった。家にたいして人数が多すぎる。テイ子の家は人間を入れる容器のようだった。六畳と三畳の、目のあらい畳をしいた、ふちの浅い桝のなかに入れられているようだった。しばらくみんなでがやがや喋舌った。無心なようにでいて、誰の眼にもとまどった陰影があった。狭すぎるからであった。光枝は部屋の狭さに尻ごみするように、立ったり坐ったりしていたが、十六歳の娘をつれて帰って行った。彼女はこの基町住宅の住人ではなかった。河向いの町の、町名と同じ名の神社に嫁いでいた。

「光枝はよそゆきの洋服を着て、下駄をはいていたわね。靴をもっていないの」
簞子は光代が帰って行ったあとで、テイ子に訊いた。

「五人もの子供をもつと、自分のものは買えないのかしら。靴を買いたい買いたいと云ってるけど、

なかなか買わないんですよ」

「あそこなんかも、そんなに困ってるの」

「なんだかこの市の者はみんな貧乏よ」

テイ子や母や子供たちと、何気なく口をきいてはいるが、篤子の本心はそこにはなかった。篤子は洋服を浴衣に着替え、木の切れはしのような低い窓わくに腰かけていた。意識的にあたりの異風景を見た。その意識はげしかった。この異風景を見るために東京から来たのだった。小さい家の窓は南にひらいていた。輜重隊あと一面に、ずらりと並んだ家並があった。長屋ではなかった。各々が一戸建てでありながら、縦横に這いのびた長屋のつらなりに見えた。個々の家のあいだに花が咲いている。ふしぎな西洋の花であった。篤子はその花の群れに親しみがなく、名前も知らなかった。家々のあいだには野菜畑もあった。石ころと雑草があった。馬の水のみ場とつなぎ場の残骸があった。輜重隊の炊事場の四角形の土台石が、地にしがみつくようにして残っている。石囲いのなかに雑草と花がふきこぼれ、子供たちの積みあげた石の小山があった。

篤子が前に来たとき、この南を向いた窓の外は、次の家の列のところまで、広い距離をもった石畳であった。いまはその空隙に、小屋のような家が点々と建っている。家の形ではなかった。表も裏もないような、物置小屋じみている。基町住宅は盆地に似ていた。盆地の西側、篤子の視線の右の方に、長い一筋の堤防があった。さっきの、野砲隊と輜重隊とを区切っていた白い舗装道路に並行している堤防である。長い堤防には、その斜面からうえの道にかけ、ばらまいたように家が建っていた。散在でなく、密度は濃かった。虫をばらまいたようだと思つた。沁み入るような哀愁感が篤子の胸

を流れた。あの土手を見にきたのだと篤子は思った。見るためではなかった。こんどこそはあのなかに溶けこんでしまいたい思いがあった。欲望に似ていた。あの長い土手には誰が住み、どんな生き方をしているのか。そして何を思い出し、何を考えて暮しているのかと篤子は思った。

三年前すでに、いまのように、堤防いちめん小バラックがばらまかれる徴候が見えていた。堤防の入口は、市の中心の繁華街に近かった。相生橋のたもとから入ってくるのである。三年前はその繁華街にちかい入口の土手際にだけ、ごたごたとした家が乱雑に並んでいた。朝鮮人ばかりであった。日本人が交っている、何らかの関係を朝鮮人とのあいだにもった日本人たちばかりのようだった。基町住宅に住む者が、みすばらしいその盆地から、他の町に出る場合、繁華街にゆくのでなくとも、朝鮮人の住む土手の端の坂をのぼってゆかなくてはならなかった。三年まえ、篤子はたびたびそこを通った。朝鮮人の家のなかには丸見えであった。表は河に向き、裏は兵營の壊滅のあとに建った基町住宅に向いた家のなかで、彼等は朝も昼も酒をのんでいた。牛乳色をした濁酒の一升びんがどの家にもならべてあった。見る見るうちに、濁酒の瓶が次々とからになってゆく有様を、篤子に想像させた。彼等は日本の着物をだらしなく、篤子がいつ通って見ても、酒のみ、麻雀をし、騒ぎ立てていた。秩序はなく、乱脈だけがあった。朝鮮動乱が強烈の度あいを深めていた。篤子は朝鮮人たちが、北の人か南の人かと思った。危懼の思いで、その人たちの顔を見たいと考えたが、まともに見ることはできなかった。彼等の方でも自分の家を覗きこむ日本人の誰をもふり向こうとしていないのだ。篤子にはある思い出があった。戦争の終結したあと、ついその相生橋のうえで、朝鮮人たちがまみれるように乗った数台のトラックと出会った。旗と幟とプラカードを押し立てて、彼等はせっかちに、

「朝鮮独立万歳！」と強く叫んでいたのだ。

「ほんとに独立できるとおもっているの？」

心のなかで篤子はそう思い、涙ぐんだ。のちになっても、このときの瞬間的な光景をわすれず、胸の底に残っているのをかんじた。あの勇ましげにトラックで走りまわった若者たちはいまどこにいるのだろうか。堤防のはずれに、板がこいの小屋をたむろさせ、昼間から酒と麻雀に身を没している連中は、朝鮮独立ばんざいのトラックに、一度も乗ったことはなかった人たちなのだろうか。彼等がだらしなくのんだくれていればいるほど、篤子は彼等の家にはいつてゆきたい誘惑をかんじた。彼等に会いたかった。どうしようとしているのか訊きたかった。篤子は作家であった。作家としての貪欲さが頭をもたげた。しかしそのとき、積極的に貪婪をおしすすめ、朝鮮人の集団に近づくほどの熱意はなかった。近づきたい乱脈がこわかった。

堤防の西下に、河をひかえた広い護岸がひらけていた。土手との二重堤防である護岸の草原にも、ところかまわず点々と家が建っていた。篤子の一カ月の滞在中、見る間に家の数はふえて行った。その日にはなにもなかった草のなかに、翌日の朝はちゃんと一軒のバラックが建っていた。一夜でできる家々は握りつぶせるほどに小さかった。河のある西に向いたり、土手の方に向ったり、南や北に出入口をつけたりして、てんでの方向に向き、どの家も新しい大きな表札をかかっているのだった。篤子はある日、いっしょにその土手を歩いていた知りあいの新聞記者に訊いた。

「どこからこんなに来るんでしょうね」

「新聞記者の僕たちにも、この街のことは、なんだかよくわからないんですがね。この護岸のは、八